

二つの椅子

井口昭久

寒い日だった。椅子と椅子の間に滑り落ちて目が覚めた。しばらくの間、自分の置かれている状況が分からなかった。右のお尻が痛かった。外では粉雪が舞っていたが、室内は暖かかった。

受験のシートズンである。受験生が全国から集まって来ていた。

私は医者として朝から診察室で待機していて、インフルエンザにかかった受験生や、弱った学生を助ける役割であった。

一日中入室者がないのが毎年の例である。

今年私が弱った。右のお尻に、「できも」ができて化膿していた。座ると強烈に痛

かった。

受験生は4つのタイプに分類される。都会と田舎の、秀才と鈍才である。受験に有利なのは、幼い頃から受験情報に接している都会の秀才である。不利なのが田舎の秀才である。田舎の鈍才は勉強しないので自業自得である。私の母校である田舎の高校から難関大学への進学は難しくなっているようだ。

私は試験場である大学へ着くと看護師に、お尻の窮状を訴えた。しかし、「便座はないわ」と冷たかった。

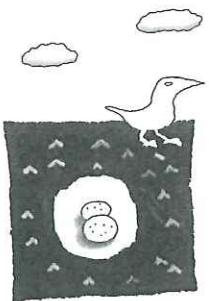
左のお尻だけを椅子に乗せて右を宙に浮かせて座ったが、長くは続かなかった。立って

新聞を読んだ。こういう場合、弱った受験生が現れると気が紛れるのだが、その日は現れなかった。

一昨年は現れた。「腰が痛くて座ってられない。立って受験をしたいのですが、許可をしてください」というものだった。今年なら即座に「OK」というところだったが、その学生に「どうして腰が痛いのか」と聞くと「親が医者だもんで」と言った。親が医者だと腰痛になるのか?と思ったが、「医者の親がすでに腰痛という診断を下しているのです。お前はつべこべ言うな」という態度であった。私は少しの間をおいて「OK」と言った。彼は都会の鈍才のように見えた。

私は椅子に座りながらお尻の痛みを緩和する方法を思いついた。ベッドにあった患者用の枕を両側の大腿部の下に置き、両側のお尻を浮き加減にして、両足を曲げて足先を患者用の椅子に乗せた。そうすると痛みは和らいだ。

入学試験で試されるのは記憶の一部である。



井

詩人ボルヘスが書いた「記憶の人、フネス」という小説は、「忘れられない悲劇」を描いている。主人公のフネスは、あらゆるものを見て、聞いて、感じて、そして何も忘れない。彼の絶対的記憶力は恵みというよりもむしろ呪いになってしまう。ひと時の安らぎも与えない。眠りに就くこともままならない。記憶の数を減らすために、昼間から目をつむってベッドの上で過ごすことになってしまった、というお話である。

私は、椅子の上で眠ってしまったようだ。私のお尻は少しずつ滑っていた。二つの椅子の間に落ちて目が覚めたのだった。

(愛知淑徳大学教授・名古屋大学名誉教授)